

第5回札幌文化芸術未来会議 【グループ①】

開催日時：令和3年6月8日(火曜日)17:00~20:00

当日は、WEB会議システム「Zoom」を使用してグループワークを行いました。

1. 新型コロナウイルス感染症対応に係る文化芸術関係の緊急支援

◆子どもを対象とした公演プログラム（アウトリーチ）

《委員の経験談》

- ・文化庁「文化芸術収益力強化事業」で子ども向けコンテンツ制作業務を実施。
- ・コロナ禍で学校公演がなくなったことが背景。
- ・幼稚園・小中学校が対象（札幌市内・岩見沢など）。
- ・アイヌの音と物語、5か所のツアー（約500万の事業）を実施。
- ・子ども向けに特化した事業、学校側・アーティスト・舞台ステージを支える人にとってハッピーだった。
- ・学校側との交渉は、知らない学校だと時間が掛かるだろうが、このときは知人の先生から他校への声掛けがあり、スムーズだった。
- ・入校の条件として全スタッフのPCR検査証明が必要だったが、1か月以内の証明書だったのであまり意味がないのではという疑問もあった。
- ・スタッフ側・受け入れ側にも陽性者が出て各所変更に困難な場面もあった。
- ・中止の場合は、払われたものは出る、当日かかる経費は出ないという条件だった。
- ・全校生徒対象ではなかった。体育館の収容人数×50%で提案した。体育館の図面を事前にもらって、それから対象者数を示した。セッティング・本番等の感染症対策状況も報告する義務があった。
- ・15分の公演を3セットするといったプログラムの工夫もあった。

《札幌市の支援制度設計への提案》

- ・公演対象分野を絞り、子どもたちにみせる（パフォーマンス系）と良い。
- ・学校公演の場合は、舞台ステージ系が多いため、展示系は工夫が必要。
- ・補助対象については柔軟性が必要（コロナ禍において）。
- ・学校公演：学校側が出すものもある（積立金で）※学校は予算が少ない。
- ・北海道文化財団がマッチングしているリストに載せてもらうだけでも価値がある。
- ・上述の文化庁の学校向けコンテンツ制作事業をモデルにして、他の施設（福祉・高齢者施設など）にも展開していいのではないかな。
- ・助成金額は100万~500万くらいのイメージか。企画・出演側はスタートアップ資金がないこともあり得るので概算払いの制度が必要（確実に前へ進めるために）。
- ・申請対象者を絞る条件設定はハードルを上げない（申請内容に対し採択額で調整）。
- ・「観に来られない」状況に対して、「舞台を持っていく」提案が必要。
- ・実施場所は、札幌市内でなくても良いのではないかな。札幌拠点のアーティストであれば良いのではないかな。支援することが優先であるべき。
- ・市内拠点の申請者であれば、2次面接も検討（極力紙資料のみで判断が良いかな）。

◆感染症対策に関するアドバイザー制度/公演認証制度

- ・札幌方式の公演実施に対する「感染症アドバイス」のコンサルタントがいると良い。市が人材を置くことはできないかな。
- ・専門家とのつながりを市ができないかな。
- ・イベント開催した際、北海道医療大学の感染症対策の専門家に監修してもらった。専門家にアドバイスを受けたことを提示すると良い。お墨付きがあることで安心感になる。
- ・専用の場所ではない施設では一つのモデルになる。
- ・アドバイザー制度は展示にも必要。
- ・コロナ禍で大手をふるって宣伝できない。移動によるリスクもあるが、アドバイザーの監修があると広報しやすい。
- ・「お客さんがすでにいる場所に旅立つ事業に対する支援」という考え方。

◆札幌版アーティストバンク（データベース）

- ・学校側に対して営業ツールになるようなものがあると良い。
- ・「学校とアーティストをつなぐデータベース」。多くのアーティストは学校側にアプローチする手段・ルートがない。
- ・公演に至らなくても何か対価を出せないかな。
- ・「なるべく企画を落とさない」条件が必要ではないかな。
- ・そもそもアーティストをリスト化できないかな。
- ・活動名をざっくり登録することを、コロナ禍からスタートしてその後継続していったらどうか。
- ・かつてアーティストバンクがあった。札幌市文化部のHP上で閲覧できた。文化部だけでも知っているものがあって良いのではないかな。
- ・アーティスト情報収集と支援をかねて登録するだけで「アーティスト側に報酬」があるのが良いのではないかな。
- ・ハイメス(北海道国際音楽交流協会)：会員自己紹介のYouTubeチャンネルを始めた。

◆相談窓口

- ・最近の情報ではSCARTS(札幌文化芸術交流センター)への相談数が増えているが、SCARTS自体の周知が必要。
- ・SCARTSの相談窓口の情報をもっと単独で発信すべきではないかな。
- ・ICC(インタークロス・クリエイティブ・センター)の相談対応：専門ジャンルの人をアドバイザーに。
- ・他の相談窓口との連携も。経済系・文化系をつなぐ。多面的対応の準備。
- ・有観客/無観客、どちらにしても相談窓口があると良い。オンライン配信についても、何から始めて良いかわからない。
- ・さっぽろアトラライブ事業(札幌市)でもテクニカルアドバイザーを置いていた。一時的なものだったが、継続すべきかもしれない。
- ・チケットセンターとの調整、有料配信の設定についても相談需要があるだろう。
- ・「相談日」の設定を明確にすると使いやすい。SCARTSもフリーになっている。
- ・音響技術の仕事が減っている。逆に音のつくり方などを相談したい。
- ・配信ライブに必要な音響はハコの中の音響技術とは異なるかもしれない。そのあたりの調査をやるための費用をつくれないうか。

◆アーティストの創作活動支援

- ・「アーティスト自身がやりたいことをやる」ための支援制度も大切(諸条件付きの支援制度ではなく、純粋な作品制作や表現活動への支援)。

- ・ コロナ禍で何を創造できるか。
- ・ アーティストが発表する前段階の「リサーチ」に対する助成。
- ・ アーティストに限らない、コーディネーター、プロデューサー、ディレクターなど企画運営者側を対象とした「研修助成」を設けることで、未来の札幌のクリエイティブ関連の人材を育てる、底上げになる。
- ・ やる内容に応じて助成額の違いがあって良い。

2. 文化政策のアイデアプラン（長期的）

◆「中堅」（10年以上、35歳以上？）作家への支援

- ・ 全国的な課題、年齢制限からはみ出していく層、ステップアップしたい人たちへの純粋な支援。1番層が厚く脂がのり、シロウトでも引退間近でもない。
- ・ クリエイティブシティとして手厚い支援を市のウリ・メッセージとして世界へ発信してはどうか。文化芸術からアンダー●●への支援を波及させる。底辺の厚さ、大義名分、市の姿勢を打ち出す。
- ・ アンダー35など年齢が助成金の制限になっている。
- ・ 市でも35歳未満の支援はある（札幌市文化芸術振興助成金「新人育成活動」、参加者の半数以上が新人であること）。
- ・ シニアオンリーという助成金もあった。中堅が抜けている。
- ・ 札幌は学校を出て20代の育成が薄い。

◆「中間」人材の育成とキャリアアップ支援（研修制度）

- ・ 「中堅」ではなく「中間」への支援。プレイヤーではなく「つなぎ手（プロデュース、ディレクション、オーガナイズする人）」。
- ・ 「つなぎ手」とのやりとりのプロセスを組み込んだ助成事業。
- ・ 「中間人材」はやってきたことで形成・キャリアアップする。自身の直接的な経験値の積み重ねが重要。
- ・ 外部や他地域のプロジェクトに関わる・派遣する・研修する仕組みを作る。
- ・ 色々な場所から人が集まることで人的ネットワークも生まれる。経験がこの土地に生きてくる。
- ・ 学生や卒業後の若い人の学び・経験の仕組みにもつながるのではないかな。市にとっての財産にもなる、まちが面白くなる。
- ・ 理想的なクリエイティブシティとは、「食えるアーティストが多い」だけでなく、「企画制作側・支える人材が食えている」街ではないか。
- ・ 研修制度がしっかりないから、やりたい人が出てこない。
- ・ 現場を経験する機会・場所が必要。（札幌の現場が）雇用することで育成される。そこに助成することが大事。長期的視点で育成プログラムの充実を設計すること。
- ・ 以前、人材育成の意味でインターンを積極的に受け入れていたが、運営体制は厳しかった。研修生の負担を軽減するためにも出来るだけ有償の制度がいいと思う。

◆アウトリーチの質を高める支援

- ・ アウトリーチにより仕事生まれる。
- ・ アウトリーチの定義、解釈も様々（表現分野によっても異なる）。
- ・ 一般財団法人地域創造が若いアーティストを対象とした研修を行っている。ディレクター（演出家）がチームについて指導してくれる。
- ・ 「アウトリーチのための」合宿・研修制度。本質的なことを伝えられることが大事。講師人材、

- つなぎ手の選定も課題になる。
- ・ 質の高いアウトリーチが、鑑賞側にもとても大事。はじめての芸術体験となる。
- ・ Go To キャンペーンを文化芸術に適用できないか。アウトリーチはその一つ。攻めの姿勢が大事。
- ・ 課題解決型の政策にもつながる。
- ・ 「アウトリーチ」自体が経験値アップになる。
- ・ 「つくる→付加価値→広報→発信→販売→購入→事業拡大の循環が必要」とICCで言っている。
- ・ 「発信」が少ない。待っているだけじゃなく、攻めて行ってお客さんをつくる。
- ・ 「創客活動」に対する支援という考え方が重要ではないか。
- ・ コミュニケーションという要素も必要。オンラインのトークが増えた。つくり手にも発信・コミュニケーションが求められている。
- ・ 作品でしかわからないこと、作家と接することで伝わることもある。
- ・ 行政が施設とつなぐ役割を担う。
- ・ 研修・合宿から現場につながるプログラムがあると良い。
- ・ アウトリーチはそもそも、所得格差が文化格差にならないようにするもの、その視点も重要。

◆他分野との連携による課題解決型の助成金制度

- ・ 「文化芸術以外の分野」と組んだ企画に対して助成する。
- ・ 2次審査をプレゼン・ヒアリングにする（申請者+他分野のセットでの面談もあり得る。）。
- ・ 全く新しい価値をもった画期的なものが生まれるのではないかな。行政の助成制度として先鋭的かもしれない。
- ・ ICC：販促コンペ、企業のお題に対する企画コンペ。
- ・ 文化芸術側は課題と紐づかないこともある。市行政側がすでに持っている課題を提示し、それをお題にすることも良いのではないかな。そもそも課題を見つけるのが大変。役所内の連携連動、横繋がりも生まれる。
- ・ 実は「フルーツを吹くこと」と「走ること」もつながっている。健康を掘り下げたテーマもお題になる。
- ・ 常設型で他分野を申請する人たちにも伝わるようにする。具体的なお題を設定することもある。町内会コミュニティが困っていることをテーマにすることもあるかもしれない。2本立てにしてはどうか。
- ・ このテーマに関心のあるアーティストはどれだけいるか。美術（平面）系には難しいか。しかし企画自体は自由度が高く、前例無き挑戦でも申請は可能。
- ・ 展示を主軸とした美術作品を作る人たちは純粋なキャリアアップの支援事業に応募すればよい。多面的な助成金が必要。幅広い表現分野の人間たちが、何かしらの制度には申請できる多面性。
- ・ 中間支援・プレイヤー問わず出してもらえるものが良い。
- ・ 現状はイベント・出し物として使われているものが多い。時間を要するプロジェクト型（リサーチ滞在等を伴うプログラム等）への助成。
- ・ 困っている側のリストもあって良いのではないかな。
- ・ 理想的には別々のものではなく他の分野でも連携すること。段階的にもつながっていくことが重要。
- ・ 課題解決の例示を市が率先してやるぐらいであった方が良い。
- ・ 課題解決型の公募も多い中、社会へ向けてアーティスト側も企画運営側も行政も「文化芸術が課題解決をする」と言い切ることが出来ないはず。課題を知ること自体や、その解決へ向けた意識を育てる、気づき、きっかけとして文化芸術が担える役割がある。問題を顕在化させる。課題解決は結果的な話。